

トリグラフの クライマーたち

赤沼正史

1986年の夏、ぼくはユリアン・アルプスの最高峰トリグラフを再訪した。以前は駆け足で通過しただけの北壁を、今回は地元モイストラナ村のクライマー達と共に、その周辺の山々を含め、腰をすえて登りこむことができた。

そこで見、聞き、体験したものは、彼らのクライミングの中に根づいた「聖なるもの」の中に体ごと入っていき、山との交感のあり方であり、また当然のこととして今も行なわれているシンプルなスタイルでの登山であった。そこにあつたのは、スロベニア独自のアルピニズムだったといってもよいだろう。



ヤロベツのラツルートでビレイするベチャール・ブラーネ

アルピニズムの「本質」を位置づけ、真に型づくるのは、表面に表われた記録や出来事であるよりも、その底辺を支えた多くの関与者の心情であり、生活様式だということが出来よう。その点において、アルピニズムは多くその地のナショナルリズムに共鳴する。

たとえば、ぼくらのナショナルリズムやアルピニズムを型づくったのが、聖なるものを隔離し危険なものとみなし、立ち入らねばならない時は少しでもそこに触れぬよう、重装備や観念に身を包むあり様、そこに関わってしまったクライマーや革命家等を社会の逸脱者として差別し危険視する心情だったとすれば、スロベニアのそれらはまさにその対局にあるとも言えよう。

スロベニア独自の「融合的な」アルピニズムは、この地の呪われた流血の歴史の底からナショナルリズム、すなわち民族解放闘争と共鳴し合って育まれてきたものだった。

田

ところでスロベニアのクライマー達と出会うきっかけを与えてくれたのは、北川勇人氏からの軽いノリの電話だった。

「あ、ども、北川です。ユーゴのトリグラフつてのはオモシロそーすね。辺地辺境クライマーどうし、一緒に行きませんか」

そういうわけで、ミラノで待合せた北川夫婦とぼくを搭載したフォードはハイウェイを東に向かう。

「スロベニア民族居住区の最高峰、ダハシユタイン石灰岩からなるこの重厚なる石の建築物は抜きんでて高いため、遠くからも目をひく存在である。トリグラフはまわりの二〇〇メートル台の岩盤から突出しており、それゆえ山頂に立てばスロベニアの全土を眺望することが出来る。これは旅行者にとっての指標であり、象徴であり、時には崇拜の対象あるいは神そのものであった」(Drago Kranj + Metka Lokar, 『Bohinj and Triglav』 46頁田)



トリグラフ北壁ババルスカルートのテラスにて。左から北川勇人、パbroチッチ・ヴィイコ、ベチャール・ブラーネ、コバッチ・カルロ、パbroチッチ・マルティン

というわけで、登山口アリヤージュ・ドム(小屋)には割とすんなりたどりついた。

一日の休養後、このルート図のない広大な壁を登るために、「案内人がわりに地元のクライマーをひっかけよう」と最も易しいスロベニアルートに出かける。この不純な動機による登攀はあっさり二人並んでのフリーソロに終わるが、クライマーとは知り合えなかった。

翌日、ぼくらはかなり強引に地元モイストラーナのレスキューチームに属するクライマー達と知り合った。すぐ村はずれのグランチスチエという壁に連れていかれ、力量を試される。初心者用の六級ルートはあっさりパス。それならばと村のトップクライマー、ペチャール・ブラーネが一週間前に拓いたばかりの七級ルートを登らされ、不様なスタイルで辛うじて完登する。

そしてぼくらは良き友人となった。

「あれを登れなかったらちよつと見下されるし、あっさり登ったら彼らが傷つく。なかなかうまくやりましたね」

下で先輩づらして見ていた北川氏が言った。

一週間の後、ぼくらは三本の登攀を終え、モイストラーナに着美に友人を増やしつづつた。

北壁最長のババルスカルートは、トップクライマー、ブラーネと北川氏、一七才の美少年パbroチッチ・マルティンとぼく、遊び人のコバッチ・カルロとマルティンの従兄弟パbroチッチ・ヴィイコの三パーティで駆け登った。

その日、キャンプ禁止区域で自立しすぎたぼくらはテントを官憲に追われ、となり谷のキャンプ場に移動。

つづけて、もうひとつとなり谷の六級ルート、ヤロベツ峰ラツルトはブラーネとぼく、マルティンと北川氏の二パーティで五時間の登攀。

だがここまでは、通い慣れた地元クライマー

にとってゲレンデ感覚だろう。言わば遠来のぼくらのために登った観光ルート。ぼくはまだ彼らと真摯な登攀を共有していない。

北川夫婦はフランスに去り、ぼくはブラーネの家に転がりこんだ。ここはモイストラーナの現役一線クライマーのたまり場となっている。もとよりここでは村人のほとんどがクライマー、あるいは元クライマーではあるのだが……。

「スフィンガはいい壁だねえ」

様々な含意をこめてぼくが言った時の彼らの表情は見ものだった。

トリグラフの麓にあるクライマーの村モイストラーナ、そこでレスキューチームに選ばれた先鋭クライマーの意地にかけても、まだ登ったことがないとは言いにくかつたろう。ただひとり登ったことのあるブラーネすら、いつもニヤつかせている口許をキュッとしめた。

一〇〇メートル近くあるアプローチの下部岩壁。そして北壁の上部にはめこまれたような垂直のスフィンガ岩塔自体が一〇ピッチを要する。内二ピッチ八〇メートルいっぱいの七級プラス。人工手段を用いて登ったにしても、フリー部分のグレードがさして落ちるわけでもない。このエリアの特徴として、難しいルートほど残置ピンが少なく、危険性が高い。

しかしいざ登るとなれば力のクライミングを信条とする彼らはさすがに豪快だ。決して易しくはない下部岩壁のほとんどを歌いながら、ロープなしで駆け上る。ぼくも息を切らしてついてゆく。

スフィンガの取付きでロープを結ぶ。まずブラーネとカルロが組んで先陣を切る。そしてぼくは岩登り修業中の少年マルティンと。

傾斜は強いがまだいくらかホルドのある手ならしピッチを快適に行く。体が大方、岩登りに馴染んできたのだ。核心部に着くと、先行していたブラーネが上で吠えている。どうやらこのピッチを終えたようだ。彼はしば



タマル谷のヤロベツ峰(奥)と人気ルートの集中する右岸の側壁帯

らく興奮さめやらず、歌をがなり、日頃しゃべりまくっている遊び人カルロは取付くと同時に口をきかなくなつた。

さて美少年マルティンは「こだけはリードしたくない」とか言う。プラーネはすでに次のピッチに張り付いて何やら唸っている。どうやらぼくがリードせざるを得ないようだなに、始めからわかっていたこと……。彼らの真摯な登攀を見たからには、こちらも彼らのロープに甘えるわけにはいかない。思ったより冷静な自分を確かめ、腰から下げた最新のエイド装備にさりげなく手をやり、すでに聡明になりつつ一步を踏み出す。

㊦

おそらく、ぼくは一生の内に数多くの透徹した登攀を求めてはいない。美のみを求めたの登攀は余りにも悲しく、死の匂いのする行為はあまりにも罪深い。

クライミングそのものによりも、むしろその周辺にこそ豊穣や喜びがある。肉体の様式としての精神の昇華はごくまれに、それもまたまだどこからかやってくるものであればよい。そしてそんなものは一杯のビールと共に日常の中に忘れ去ることができれば、それが一番だ。

ぼくらは Pivo というスロベニア産らしきビールを並べて、ずい分と多くのことを語りあつた。といつても英語の話せる人間はこの村に数えるほどしかおらず、話がこみいつてくるとたいい誰かが自転車に乗って、元カリフォルニア住のコトニック・プラスタを呼びに行くのだった。

クライミングやクライミング後のカヌーなど川遊びのすべては「OK?」の問いに「OK」と答えることでもまされていたのだ。もつとも、カヌーでは「ノー」が言えないがために、かなり危険なところに突っこまされたものだ。

そんな中で、ぼくらはやがて近い将来行なうべきヒマラヤでのジョイント・クライミング

の計画を身ぶり手ぶり、それに英語、スロベニア語、日本語までをも動員して語り始めた。「要するにジョイントの場合、問題はコミユニケーションだな」

「うん、だからぼくらはこれから英語を勉強する。君は引き換えにスロベニア語を覚えてくれ」

ん、何か変だな。ぼくにとつても英語は外国語なのだが……。

そういうわけで、ぼくは会談に飢えると隣村ドウエで英語勉強中の美少女マウク・アンドレアを誘って、夜の湖に泳ぎに行った。彼女はまだ一八歳だが、ウオトカを呑みすぎていておぼれた時に英語で助けを求めることだつてできた。

㊦

トリグラフの初登頂は、歴史家の見解に従うとすれば一七七八年八月二五日、南面レディン側から薬草商で薬師のロブレナック・ウイリツァー、コプリフニツクの獵師ルカ・コロシエニク、イエレカの獵師シュテファン・ローチツチとマティヤ・コススの四人によって成された(もちろん傾斜のゆるいトレンタ側の獵師やドリチエの羊飼いがそれ以前に登つていたことは考えられるが)。

この登頂は、皇帝ヨゼフ二世、バルタツァール・ハケット、ツイガ・ゾス等の発案によって行なわれたという。バルタツァール・ハケットは一年後、自らこの山頂に達し、四人が登頂の証に残したノミとハンマーを発見する。

トリグラフ登山史の幕が第一帝国、すなわち神聖ローマ帝国に関わって開けられたことは、後のこの山の運命に示唆的ではあるが、実際に登山者がこの山に見られるようになるのは約一〇〇年後となる。

ユーゴスラヴィアには少ないキリスト教区のトリグラフ、その初期の登頂のいくつかは地元教会司祭によってなされた。司祭スレニ・イヴァン・ツァンによって、スロベニア



トリグラフ北壁右端にあるスフィンガ(写真中央部)は急傾斜で難度が高く残置も少ない

初の山岳会トリグラフスキ、プリヤテリ(トリグラフの友たち)が創られたのが一八七二年、ビスマルクによって第二帝国が打ち建てられた翌年だ。この山岳会に民族権利運動への意志を感じた、時の権力はその存在を否定する。しかし彼らは山頂への道の整備に貢献し、また現在アラニカロツジのあるレディンにささやかな山小屋を建てた。

民族主義が本場に盛り上がりを見せるのは、スロベニア山岳会が創立される一八八三年の前後になる。このころドイツ・オーストリア山岳協会がスロベニアの象徴トリグラフに乗りこんでくる。トリグラフに展望台を作り、ケーブルカーを架けようという彼らの急激な観光開発に反発し、抵抗するスロベニア山岳会の中心人物が、教会司祭にして作家、教育者、山岳ガイド、聖歌隊指揮者、観光案内人で、もちろん心身からの登山家、ヤコブ・アリアージュであった。

ドイツからの登山者はこの山を覆い始める。スレニ・イヴァン・ツァンと彼の仲間による「ささやかな山小屋」は建てかえられ、ドイツ語で「トリグラフ・ヒュッテ」と名を付された。

一八八八年、モイストラナーの隣村ドウェの教会司祭となったヤコブ・アリアージュはトリグラフ山頂で一本のびんを見つける。その中には一八七三年にここに登った、彼の師カンデルナルがラテン語で印したメッセージが入っていた。

「O mons montium, uni slavics gentes!」
(おお至上の山よ、スラフ民族の団結を)

出

ヤコブ・アリアージュはスロベニア人のトリグラフのために闘いつづけた。彼はモイストラナーの住民から、山頂の「耕作の出来ない荒れた土地」を買い受け、その彼の土地にアリアージュ・タワーを設置した。そこには登山者が自由に書くことのできるノートが置かれる。

当時、モイストラナーからプラタ谷を通って、北壁にそって山頂に到る唯一のルートであった「ドイツ・ルート」にかわって、スロベニア山岳会の人々はもうひとつの「より傾斜がゆるく、易しい」ルートを作つた(筆者は易しいとは思わないが……)。この道には当時スロベニア山岳会会長だったフラン・トミニシク博士の名が付けられる。

このころアリアージュ・タワーにはひとつのメモリアルがあった。これは初登者を讃えるものだ。そこにもうひとつのメモリアルが一九四四年に掲げられる。パルチザンによる登頂記念であった。

スロベニア山岳会による素朴な民族運動は、パルチザンに回収され、受け継がれ、激化した。

ナチスも焦せる。モイストラナーには次のような掲示が出された。

「トリグラフに、ドイツよ永遠なれ」

トリグラフを型どつた柄はスロベニア軍の軍服に施され、パルチザンはトリグラフの型をした帽子をかぶり始めた。

一九四四年五月、まだ雪深いトリグラフ山頂にパルチザンの旗がひらめいた。プラチュ・オストロウハー率いる勇敢な旅団は、そこで発砲すると同時にスロベニアの解放を宣言した。

アリアージュ・タワーのノートは戦火を奇跡的に免れてまだそこにあった。彼らはそこに自分の名を印し、さらに「ここから来たか」の問いの下に「ヤブの中から」と書き、「ここへ行くか」の下に「新たな夜明けへ」と答えた。旅団長のオストロウハーはさらに次の一節をしたためる。

われらが山々の君主よ!
われらついに足かせを解き放ち
あなたの祭壇にやつてきた
新たな時代の旗をひるがえすべく

(筆者訳)

同年八月二日、パルチザンの二番目のグル



ババルスカルトでビレイするマルティン

ープがやってきて、山頂にあったナチス(第三帝国)、イタリアとの国境を示す支柱を掘り出し、峡谷に投げすてる。

そして一〇月、三番目のグループがベオグラードの解放を讀んで旗をふるべく、ここにやってくる。

一〇月二日、ユーゴスラヴィアの解放を祝う旗がここでふられた。

だが歴史は決して終わらない。やがてスターリンと対立するようになる彼らは自主独立路線を勝ちとるが、その中心人物チトーはスロベニアの人々にとって他民族の間であつて……。

血なまぐさい歴史の表舞台の底辺を支えた人々が、どのような心情を抱き、どのような生活様式を維持してきたのか、ぼくの想像力にはついに及ばない。

それにしても、山に登る、という非日常的行為がいかに政治や歴史の場に深く関わってきたことか。否、ここで山登りはむしろ、彼らが否応なく関わる日常そのものであつた。彼らが、観念や象徴の領域にある聖なるものを聖化しなかつたのではないか。

彼らは美にたくましく山を、観念を、思想を此岸に引きこみ、それらと融合しているように見える。

たとえば彼らにとつて七級のクライミングが特に神格化されることはない。この地で岩登りが始まるのは一九〇〇年ころからだ、一九二〇年代に拓かれたルートのいくつかにさえ、今七級が付されている。ここでは、困難な登攀をビールのつまみに、生活の中に忘れさるというぼくの理想の実行が見られる。

決して安全ではないこの地の七級ルートは、他の易しいルートとかわらずある程度コンスタントに登られているが、そこでの事故率の低さも一筆に価しよう。事故者のほとんどは、たとえば三年前ドイツルートで墜ちたぼくのような、外国人である。

クライマーのレベルの高さは言うに及ばず、

ここでは整備されたハイキングルートでも平凡と四級クラスの「プリーソロ」を要求されるのだ。そこをビールぶくれた老夫婦が手をつないで登っていく様をぼくは何度か目撃した。そのような状況がトレーニングによって勝ちとられたものだと決まっていまい。

ところで、ぼくのひと夏の遊びにつきあつてくれたモイストラナーナSOS(レスキュー)の人々の活動は、すべて税金でまかなわれ、彼らは自由に使えるヘリコプターを持ち、救助活動を行なう。縦縦士の腕はぼくの目にはまさに神ワザと映った。もちろん活動の際、彼らは日常の仕事の有給で、尊敬の眼を集めながら休む。かくして、この山で事故を起こした者は、国籍を問わず無料で迅速に救助されるのだ。

ぼくは自らのいる社会を想い、赤面を禁じ得ない。登山規制条例、ジャーナリズムの成りつつある登山の否定、遭難対策制度の不備etc、まさに文化的な恥部である。

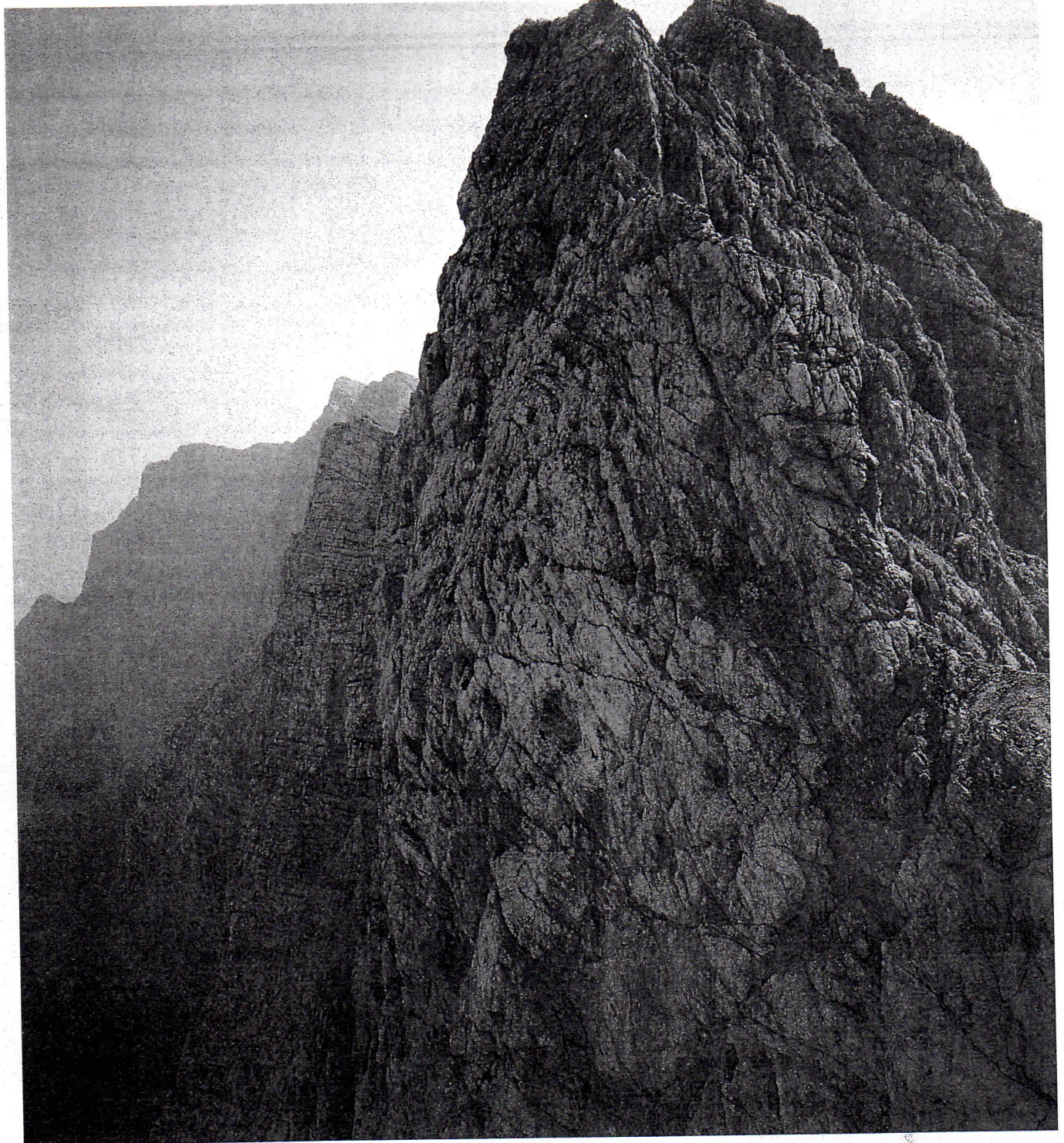
けだし、美しいもの、聖なるものに関わる時の意識の違いとも言うべきか。

出

連日のクライミング、カヌー、ビール等の合間を見て、ぼくとブラーネはグランチスチエに新しいラインの試登をくり返していた。これはハンク越えのショートルートだが、トップロープは不可能で、ぼくはボルトを打ってプロテクションを設置してから登ろうと言ったが許可が得られなかった。そういうわけで、このルートはリュブリアーナの過激クライマー、ユハント・ダレの確保にはげまされつつ、冷汗まみれの「勝負」で完登のはじびとなった。「ハラキリ」ルートとする。

ダレとはその前日、トリグラフ北壁の「ヘルバ」という六級上ルートを三時間で駆け登っており、その気合に乗っての登攀だつた。

ダレもまたパワフルなクライマーだ。モイストラナーナの人ではないが、彼もこの平和な村を愛し、しばしば訪れてトリグラフの周辺



美しいタマル谷のシテ峰には極端な難ルートが拓かれている

を登りまくってはモイストラナーの酒場で呑んで帰るのだ。

村の酒場では実に多くの人々に出会った。いつも奥の席で真赤な顔をしている、いかにもアル中然としたおじさんは、ついこの間エルキャピタンのトリプルダイレクトを登り、マカルー等にも遠征していた。その横の腹の出たおじさんはかつて天才とうたわれたヘリのパイロット。ぼくをさんさんカヌーでしごいたカヌー狂のお兄さんは、頼まれれば北壁のガイドもする。その向こうではフィッツロイにルートを抜き、今年アルプス三大北壁を連続登攀したお兄さんと、札幌オリンピックに参加したスキーヤーが岩登りの話をして

いる。
隠居して日がなビールを呑んでるおじいさん達さえ、水を向けると「オレがあ壁にルートを作つた時は……」なんてド・イツ語で話してくれる。

ぼくらが北壁を登ること、アリヤー・ジエム（小屋）までお弁当を持って迎えに来てくれたバーバラも岩登りを始めた。初めてのルートは北壁ドイツルート。そして彼女のような初心者や、一七〇一八になった少年を指導するのが主にレスキューのメンバーの役割となつている。

家に立ち寄るとまず「ビールかコーヒーか」ととき、中登山登りのスライドを手作りのケーキを食べながら見終わるまでは出してくれない。このやさしき人々と接すること、この地の凄惨な歴史への想像力は閉ざされていく。妙に混沌とした夢から醒めたのは、その後ドロミテの観光的な登攀を楽しみ、自分がまた「浮わつた」世界に帰るべき人間であることに気がついた時か。

今では個々のエピソードを鮮明に想い出すこともままならない。ただ、トリグラフ北壁のアドリア海の光に満ちた、透明な明るさだけが、残像としてぼくの中に場を占めているだけである。

（あかぬままさし）